

他者への理解と

人類はどこから来て、どこへ行くのだろうか？ こうした疑問を、生物進化化学などの視点から解き明かそうとしている、長谷川眞理子先生。
やさしい語り口で書かれている長谷川先生の著書には、専門知識がない私たちでも「そうだったのか！」と納得できる、面白い事柄がたくさん紹介されています。本誌では、特にヒトという生物が持つ「生きる力」「学ぶ力」について、身近なテーマから書いていただきました。

チンパンジーに言語はない

前回までのところで、「視線の共有」について書いた。お互いに視線を交わしながら、外界について共通認識を持つというのは、私たちが普段当たり前のように行っていることである。しかし、これはきわめて人間的な能力なのだ。そして、このことが、言語の獲得にも、文化の伝達にもつながっていく。

言語は人間的な特徴で、人間の言語に相当するものを持つている動物は、ほかにはいない。人間ともっとも近縁なチンパンジーもずいぶん賢いが、言語は持っていない。研究者が一生懸命教えても、言語を習得することはない。

彼らは喉の構造が違うので、人間のように母音や子音をつなげて自在に言葉を話すことはできない。しかし、単語に相当するものを図形のシンボルにして教えることはできる。例えば、青い色の三角形のプラスチックを「リンゴ」という単語とする、黄色いS字型のプラスチックを「くださ」という単語とする、という具合だ。こうして教えると、

チンパンジーたちは、200以上の「単語」を覚え、「リンゴ」「くださ」というように、二つの単語をつ

なげて要求を出したりもする。

チンパンジーに言葉を教え

ようとする研究は、こうして

30年以上も続けられてきたが、

結論を言うと、チンパンジーは言

語を習得することはない。なぜな

ら彼らは、ついに文法というものを習

得することがないからだ。文法とは、単

語を並べる規則である。「男がシカを殺す」

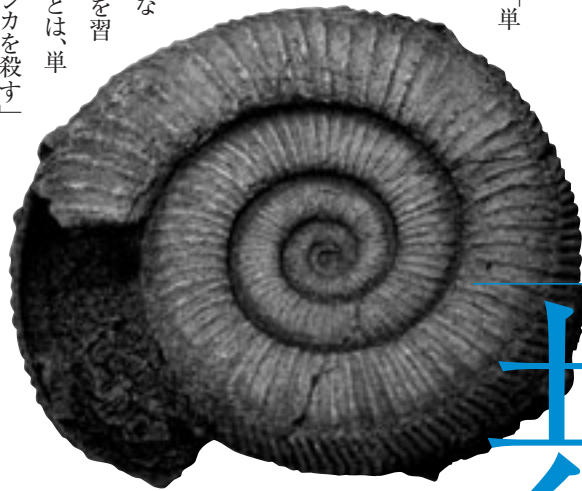
という文章と、「シカが男を殺す」という文章とは意味が

まったく異なる。それは、単語の並べ方の規則が文の意味を

決めているからだ。チンパンジーは、それぞれの単語の意味を

離れて、その上にこのような規則が存在することを理解し

ないのである。



共感

連載エッセイ

ヒトの生きる力、学ぶ力を知る

第3回

●総合研究大学院大学教授(進化生物学、行動生態学)
長谷川眞理子

はせがわ まりこ

1952年東京都生まれ。東京大学理学部生物学科卒業。同大学院理学系研究科博士課程修了。東京大学理学部人類学教室助手、専修大学教授、米エール大学人類学部客員准教授、早稲田大学政経学部教授などを経て2006年から現職。2008年日本進化学会会長に就任。専門は、進化生物学、行動生態学。著書に『クジャクの雄はなぜ美しい?』『進化とは何だろうか』『雄と雌の数をめぐる不思議』など。

人間の子どもは世界を描写する

それはさておき、ここで取り上げたいのは別のことだ。記号を操ることを教わったチンパンジーは、いつたいどんなことを「話す」のだろうか？ そのほとんどは、「リンゴくたさい」「くすくすって」などの要求なのである。そして、差し迫った要求がないときには、自発的に「話す」ことはほとんどない。

振り返って、人間の小さな子どもはどうだろうか？ 子どもは驚くほどの速さで言葉を習得していくが、子どもが話す言葉のほとんどが要求だということはない。もちろん要求もするが、「おつきい、わんわん」とか、「お花、ピンク」とか、自分の興味をひいた物についてたくさん描写する。そのとき、その物に手を伸ばし、親などの大人と目を合わせて視線を共有する。別に、わんわんがほしいと言っているわけではない。お花を取ってくれと要求しているわけでもない。世界を描写し、その描写を他者と共有しようとしているのだ。

子どもにもそのように言われた大人の方はどうするか？ 「そうね、わんわん大きいわね」とか、「お花、きれいなね」など、子どもの描写しているものについて述べ、同調し、確認する。大人からの確認があると子どもは喜ぶ。つまり、人間の子どもは、興味をひかれた外界の事象について、他者と認識を共有したいのである。そして、共有することがうれしいのである。初めて見るものの場合には、手を伸ばして「あー、あー」というような声を出し、大人を見る。そうすると大人が、「これはミカンって言うのよ」などと教えてあげるのど、新しい単語の獲得も促進される。

どうも、チンパンジーにはこの、認識を他者と共有したい

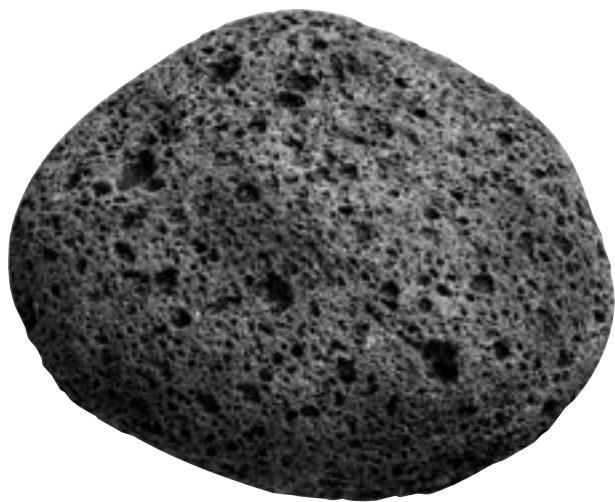
という欲求がない。「ねえ、ねえ、あれ見て」に相当する声も身振りもないのだ。チンパンジーも、みんな同じ物を見ることはある。しかし、「みんな見てるよね」という認識の共有がないし、「せーの」と動作を同期させて共同作業をすることもない。

「教えたい」という欲求

ところで、教えるというの、きわめて人間的な行為である。教えるには、教える人と習う人との間で、視線の共有があるし、外界に関する認識の共有がある。チンパンジーにはそれが無いのだから、チンパンジーがほかのチンパンジーに何かを教えるということは、ほとんどない。

私は、かつて、野生のチンパンジーの行動を研究していた。彼らは、細い木の枝をアリの穴に差し込んでアリの釣って食べる。しかし、チンパンジーの母親が子どもにも道具の使い方を教えることは1度も見なかった。だから、チンパンジーの子どもが道具の使い方には習熟するまでには、大変長い時間がかかる。私だけではなく、これまでのすべての研究で、チンパンジーの母親による「教育」と呼べるようなものは、1回しか見られていない。

その1回は、西アフリカのチンパンジーの集団で見られた。その集団では、堅い木の実を石で割って食べる。子どもが何度石で割ろうとしてもうまくいかないでいたら、隣に座っていた母親が自分の持ついた石で、心持ちゆっくりと実を割り、その石を子どもの前に置いたという観察だ。でも、そんなことはこの1回しか起こっていないのである。



連載エッセイ

ヒトの生きる力、学ぶ力を知る

第3回

感

人間は、自分ができていることを他人がうまくできないでいると、どうにも我慢できなくて教えてしまうものだ。「見ちゃおれん」という感覚である。まったく見ず知らずの人たちが、電車の中などで、「○○に行くのには、ここで降りたらいいのだろうか。」などと不安げに話しているのを小耳に挟む。それが自分の知っていることであると、赤の他人でもつい教えてあげたくなる。人間は、本当に「教えたい」のだ。

他者の心を理解する

人間はどうして「見ちゃおれん」という心境になるのだろうか？ それは、第1に、相手が何をしようとしているのか、他者の意図や欲求が理解できるからだ。第2に、前回述べた「私」と「あなた」と「物」の三項関係の理解があるので、相手が何かをしようとしているという状況を、教える人と教わる人との間で共有することができるからだ。第3に、因果関係の推論ができるので、何をすれば解決するのかを理解できるからだ。

これまで第2の三項関係の理解について述べてきたが、第1の、他者の意図や欲求の理解も、とても大事である。人間は、他者には「心」があり、その心が意図や欲求を持っているから人は動くのだということを、自動的に理解している。しかし、チンパンジーがそれをどれほど理解しているのかということは、ここ30余年の研究の大問題なのである。チンパンジーだって、他者の意図が分らないことはないが、人間と同じレベルではない。

さらに人間は、他者が何をしようとしているのかという「目的、意図」や、他者が何をしたいのかという「欲求」を理解できるばかりではない。他者が、どう感じているのか、うれしいのか、悲しいのか、焦っているのか、怒っているのか、怖がつているのか、も分かる。そして、多かれ少なかれそれに共感する。この「共感」ということも、チンパンジーにどれだけあるのか、定かではない。

私たち人間は、他者を理解したり、共感したり、外界について他者と認識を共有したりすることが、あまりにも当たり前なので、ほかの動物だってそんなことはしているだろうと考えてしまう。そして、人間がほかの動物と違うのは、計算ができたたり、いろいろな技術を考えだしたり、科学が分かつたりする、高度な認知能力だと思っている。しかし、そうではないのだ。人間は認知能力も高いが、自分の心と他者の心、その感情、思いに対する、とてつもなく深い理解と共感があるのだ。そんな動物はほかにはいないのである。

高度な認知能力は、人間だって無理して使っているから、そ、その大切さを自覚するのである。他者の理解と共感、当然のようにその能力を使っているがために、かえってその大切さが自覚できないのだろう。これは、人間の隠された宝なのだ。

他者への理解と共

